

伊東興山

庭の菜を混ぜて極めり七草や  
鳥待ちて蕾ふくらむ庭の梅  
緑陰をひっそり見守る桐の花  
紺碧のマルタの海や夏の波  
天高く霧中に浮かぶ奇峯群

新涼の駅に佇む古老かな  
軒先で食欲誘ふ吊るし柿  
禅寺の紅葉見上げる池の鯉  
平成の成人登る丘凍てり  
嶺の雪仰ぎ見急ぐ冬構

.....  
先生が早くお元気になり、又のご指導を念じております。

岩 湊 如 雨

すれ違ふ破魔矢の鈴や肩ぐるま  
三日後は桃花と笑むや紺がすり  
春宵や清水焼の猪口に酌む  
保津川の飛沫に遠き桐の花  
郭公の声やみ貨物列車来る  
流木や千里連なる夏の波

書出しの文決めかねっ秋暑し  
遠祖も通りし畦や曼珠沙華  
大根引く大地あらがふこともなく  
漱石忌素知らぬ顔の猫過ぎる

.....

一緒に舟下りをした 保津川……の句を採っていただけで間もなく  
谿聲主宰が不意の病に倒れられた。以来作句意欲がきわめて減衰、  
なかなか元に戻る気配がない。主宰の本復の早からんことを、そし  
て句会の真ん中の席に復た座られることを切に願っています。

内山竹林 (武司改め)

オリオン座凍てつく夜の初詣  
初雪に鉢植の枇杷傾ぶきぬ  
花みずきダイヤをつけた雨上がり  
花突く目白の番隠れをり  
七き妻と孫連れて来し夏祭  
砂山を築けどさらふ夏の波  
藪中の小滝の虫にヤマメ飛ぶ  
三陸のリアスに砕く夏の波  
如何にして登り来たらん空蟬ぞ  
オホーツク羽ばたき降りて息白し

東北大鬼城句会に参加して

おおよそ、俳句なるものを詠ぶ事になるとは、思いもよらぬ事であった。しかし第4回から「東北大鬼城句会」に参加させて頂いて、自然を観察する目が大きく変わった。四季の移り変わり、草花の成長、小鳥たちの飛来、雨・風の音、蝉や虫の音の強弱など見るとはなしに見て、聞くとはなしに聞いていても、それを心のうちで受け止めて、これはどう表現するのかな?と自問しているもう一人の自分に気づく。社会の動きや、人間関係のことについては、あまり馴染まないで句作りは難しい。でも祭りごとや、孫たちのこと、亡き人のことは句にしてみたいと思う。また遠く離れた故郷のことや、幼き頃の思い出が、日頃の行いの中で、ふと俣ばれ、その情景を句にしたいなと思うことがある。

新会社を立上げ日も浅く、鬼城句会にはあまり参加してはおりませんが、大変貴重な「新たな習慣」を鬼城句会は、私に与えてくれたと感謝しております。

村上君とは、川内での教養学部時代に、学生運動で「六十年安保闘争」を共に論議し戦った仲間です。その彼を「鬼城句会」で見た姿は、全くの別人に映りました。

口角泡を飛ばす口調は、いつしか、自然のささやき、人の息遣い、暮らしの匂いを感じ取り、静かに、率直に表現する俳人となっておりました。彼が再び元気になり、もう一度共に語れることを祈念致しております。

小川修人

つちふるや五重塔の黄昏るる  
江ノ電の家並抜けて春の海  
緩る緩ると初夏を旅する八高線  
ノンちゃんの雲に乗りたし墓  
入谷より短冊付けてお中元

飛ばし読む推理小説涼新た  
夕星や茶寮の庭に添水鳴る  
短日や木曾の関所へ山迫る  
冬構疎林の中の山家かな  
巖頭に凍てつくしぶき海鳥

奥山游悦

道場に気合一声鏡餅  
旅心なほ止みがたく西行忌  
日本の空が大好き鯉のぼり  
無人駅遠巻きにする蛙かな  
雲の峰明日は異郷へ旅に立つ  
新涼や生徒の顔も大人びて  
払うてもついと寄り来る赤蜻蛉

親潮の紺に染まりし秋刀魚かな  
夕明かりあふれし水に葱洗ふ  
人混みを怖れずに行く冬帽子

.....

この句会に参加してからまだ日が浅いが、谿聲主宰から褒められてその気になり、また、気心の知れた仲間との合評も楽しく、大変勉強になる。専門誌などを読むと、俳句については国際交流も盛んで、日本の名句のすぐれた外国語訳もあるのに驚く。あらためて、俳句は世界に誇るべき日本の文化であることを再認識した。  
週末などに、あれこれ句作をするというひとときは、自分にとって、もっとも心が安らぐ時間である。思いがけない俳句ができて、自分でも驚くことがある。もう一人の自分を発見する愉しみともいえる。このような愉しみを教えてくれた主宰の回復を切に願う。

加賀美竹風

新年のクラス会兼ね初ゴルフ  
八重桜散りたる後も花むしろ  
竹の音や箕輪の里につつじ咲き  
山女喰いっい飲みすぎの夏の夜  
木枯しやまたも友逝くさびしさよ

鬼城先生と我が家のご縁について少し触れて見たいと思います。  
我が家は群馬県高崎市から十三キロの田舎町にあります。私の祖父が鬼城先生の直弟子で俳号は狸村を名乗っております。自分の句集も出していたので、趣味にしてもかなり凝っていたのだと思います。そんなことで我が家にも額に入っている先生の俳画や掛け軸が数点御座います。常時座敷に飾ってあるのは、縦一尺、横五尺位の俳画で、六人の人物（僧侶と武士）が座しており、句は、「秋の灯を 囲みて何を する宿ぞ 昭和六年春 鬼城并題」とあります。更に鬼城草庵の前主・村上信氏は、私の元の職場である群馬銀行の大先輩で御座います。そしてこの村上信氏の養子とられたのが、鬼城先生の孫に当たる我が村上谿馨先生というわけです。

先生が一日でも早くお元気になられますことを心よりお祈り申し上げます次第であります。

小林幸風

隠居老思ひは無色屠蘇旨し  
七草粥口元ゆるむ百二歳  
気がつけば老老介護七日粥  
春爛漫ふと思ひ出す父の笑み  
春風や小蜘蛛が飛んで銀の糸  
雷や子犬とびこむ腕の中  
黄金の銀杏並木はモーツァルト  
柚子の湯に浸りて聞きし雨の音  
凍る暮宴の帰路の友倒る  
百歳を重ねし母と大晦日

.....

谿聲主宰から、百歳のお母さんと一緒に居るのは望んでもで  
きないこと、ぜひお母さんを詠んでみて下さい、と言われた  
ことがあります。一日も早い回復を祈っております。

鈴木蓮圃池

神保町礼讃

いさかいて睦みて姉妹雛祭  
枯山水連翹石を食みいたり  
朝寝して今日の計らい定まらず  
平穩の日々の明け暮れ立葵  
結願の敬礼参りや心太  
含羞草愚直貫く生なりき  
かなかなや宿題の山減りもせず  
嫁に出すごとく新米送り出す  
地震の傷残して北へむら紅葉  
冬構十戸の村の息づかい

弁慶さんのご縁でこの句会に入会して早四年になりました。その間、二十四回の句会に五句づつ投句して一二〇句、その予備も含めて六〇〇句作ったことになりました。

この句会の特徴を挙げれば、  
谿馨先生が出す兼題が、あまり日常的でないものを選んでくれて鍛えてくれることが一つ、

知的レベルが高く揃っている為に、全体に上達が早く、既に上級に手のかかる人がいることが一つ、

法学部出身で即断即決の組織人であった為か、入門早々から趣向をこらした俳号を持った人が殆どであることが一つ、  
等 非常に楽しい句会になりました。

上手になる為には、沢山作って沢山捨てること、作り続けることが要諦とされますので、それに従い、楽しみながら作句して行きたいと思えます。しかし、人間の営為である以上、五感の健全な働きが前提です。で、眼が衰える、耳が遠くなる、歩けなくなると句力が落ちます。作句の旬は八〇才そこそままですかね。もう一作り頑張りたいと思います。それにつけても、谿馨先生の快癒とご指導を切にお祈りする次第です。

早く来よ汝が設えし花筵

蓮圃池